

赤いろうそく

山から里の方へ遊びにいったさるが一本の赤いろうそくをひろいました。赤いろうそくはたくさんあるものではありません。それでさるは赤いろうそくを花火だと思いきんでしまいました。

さるはひろった赤いろうそくをだいに山へ持って帰りました。

山ではたいへんなさわぎになりました。何しろ花火などというものは、しかにしてみもしにしてもうさぎにしても、かめにしても、いたちにしても、たぬきにしても、きつねにしても、まだ一度もみたことがありません。その花火をさるがひろってきたというのであります。

「ほう、すばらしい。」

「これは、すてきなものだ。」

しかやししやうさぎやかめやいたちやたぬきやきつねがおし合いへしあいして赤いろうそくをのぞきました。するとさるが、

「あぶないあぶない。そんなに近よってはいけない。爆発するから。」といいました。みんなはおどろいてしりごみしました。

そこでさるは花火というものが、どんなに大きな音をして飛び出すか、そしてどんなに美しく空にひろがるか、みんなに話して聞かせました。そんなに美しいものならみたいものだと思いました。

「それなら、今晚山のでっぺんにいってあそこで打ち上げてみよう。」とさるがいました。みんなはたいへん喜びました。夜の空に星をふりまくようにばあつとひろがる花火を眼にかべてみんなはうっとりしました。

さて夜になりました。みんなは胸をおどらせて山のでっぺんにやっています。さるはもう赤いろうそくを木の枝にくくりつけてみんなのくるのを待っていました。

いよいよこれから花火を打ち上げることになりました。しかし困ったことができませんでした。と申しますのは、だれも花火に火をつけようとしなかったからです。みんな花火をみることはすきでしたが火をつけに行くことは、すきでなかったのです。

これでは花火はあがりません。そこでくじをひいて、火をつけにゆくものをきめることになりました。第一にあたったものはかめであります。

かめは元気を出して花火の方へやっけていきました。だがうまく火をつけることができませんでした。いえ、いえ。かめは花火のそばまでくると首がしげんにひっこんでしまつて出てこなかったのであります。

そこでくじがまたひかれて、こんどはいたちがいくことになりました。いたちはかめよりはいくぶんましでした。というのは首をひっこめてしまわなかったからであります。しかしいたちはひどい近眼きんがんでありました。だからろうそくのまわりをきよきよるとうろついているばかりでありました。

とうとうししが飛び出しました。ししはまったく勇しいけだものでした。ししはほんとうにやっていって火をつけてしまいました。

みんなはびっくりして草むらに飛びこみ耳をかたくふさぎました。耳ばかりでなく眼めもふさいでしまいました。

しかしろうそくはほんともいわずに静かにもえているばかりでした。

底本*「新美南吉童話集 1 ごん狐」

著者*新美南吉

出版社*大日本図書

出版年*1982年1月31日初版第1刷発行

入力に使用*1999年3月25日第11刷発行

入力*安城市中央図書館職員